

# 読書感想文の指導について

## 単元「読書の記録や感想を書く」(東書4年下)

### 1 はじめに

足利市立東小学校 刑部 しげる

児童はだれでも本を読むのは大すきである。週1回の読書の時間がぬけたり、何かのつごうでとりやめになったりしようものならたいへんである。にもかかわらず、「読書感想文を書きなさい。」という、あまり喜ばない。それどころか「わあっ。」となさけない声やため息さえ聞こえる。実態調査をしてみたところ、書くのがすきな児童は29人中5人、きらいな児童は24人である。きらいな理由は「めんどうくさい。」が圧倒的で「書き方がわからない。」「感想をどうまとめたらいかがわからない。」「あらすじを忘れてしまい、本を読みかえすのがめんどうだ。」など、いろいろある。この実態から、読書感想文の書き方を徹底的に指導しなければならないと考えた。

また、新学習指導要領では、読書の感想を書く活動が3年生におろされており、4年生では本格的に読書感想文の指導を行わなければならないと考える。

そこで、読書週間中でもあり、読書に興味・関心のたかまっている時期をねらって読書感想文の指導を実践してみた。

### 2 実践のねらい

- (1) 読書感想文の組み立てはどのようにしたらよいか、感想とすじのおりませ方はどのようにしたらよいかなど、基本的な書き方の指導をする。
- (2) 作文指導における教科書教材の位置づけは、はじめに学習するのがよいか、書いてから学習するのがよいか、いろいろ問題になるが基本的な考え方として総合的に扱うことをさけ、分析的に文章の組み立て方を指導する段階で扱ったり、感想とあらすじのおりませ方をくふうする段階で扱ったり、また、各自ではじめに書いた文章と比較させながら扱って行くことにした。

### 3 教材研究

- (1) 児童の実態(児童数 男17 女12 計29名)

表1

読書感想文を書くの好き	5人(17.2%)
きらい	24人(82.8%)

表2 すきな理由

勉強の役に立つから	3人(10.3%)
字がうまくなるから	2人(6.9%)
思ったことそのまま書けるから 話しよりよいかしく書く	2人(6.9%)
本を読むのが好きだから	2人(6.9%)

表3 きらいな理由

めんどうくさい	17人(58.6%)
書き方がわからない	8人(27.6%)
すじばかりでへたに書いてしまう	5人(17.2%)
読んでも出てくる人の気持ちがわからない ながい話だとすじがわからなくなってしまふ	9人(31.0%)
自分で思ったり考えたりすることがない	2人(6.9%)
作文がきらい	8人(27.6%)
本を読むのがきらい	2人(6.9%)

表4 めんどくさい理由

感想は書くよりもことばで言う方がよい	4人(13.8%)
考えてから書くのがめんどろ	4人(13.8)
読んだあと忘れてしまうので読みかえすのがいや	6人(20.7)
本があつときは特にめんどろ	2人(6.9)
どう書いたらよいかわからない	3人(10.3)
感想が書けない(すじばかりになってしまふ)	1人(3.5)
感想のまとめ方がわからない	2人(6.9%)

表5 今までに感想文を書いたことのある本

月の輪ぐま(3年) 26人	太陽の子と水の魔女2人
ケンはおつちや(4年) 6人	ないた赤おに 2人
おばあさんのひこうき(2年) 4人	リコはおかあさん 2人
・いたずらラッコのロッコ ・アルプスの少女	
・家なき子 ・エジソン ・そらとぶ家	
・ワントン ・ガリバー旅行記 ・森は生きてる	
・銀河鉄道の夜 ・小さなモモちゃん	

表6 これから感想文を書きたいと思う本

キューリー夫人, ナイチンゲル, ヘンケラー, リンカーン, 牧野富太郎, 野口英世, 宝島, ああ無情 ロビンソンクルソー, タイムマシンの話, 若草物語, ほらふき先生, 昆虫記
--

表1から6までは、読書感想文についての調査をまとめたものである。これをもとにして次のように児童の感想文に対する意識をまとめてみた。

- 1 児童は今までに、いろいろな本を読み、読書感想文を書いた経験を持ちながら読書感想文を書くのはすきでない。
- 2 きらいな理由をみると、「めんどくさい」がいちばん多く、「書き方がわからない。」「すじばかりでへたに書けてしまう。」という順である。なぜ、めんどろなのかほり下げて問うと「書くよりもことばで言う方がよい。」「考えて書くのがめんどろ」「忘れてしまうので本を読みかえすのがめんどろ」「どう書いたらよいかわからない」など、さまざまな理由がある。これらを総合してみると、へたに書けてしまうのは書き方がわからないからではないだろうか。また、めんどろくさいというのも書き方がわからないからであろう。つまり、きらいな理由の1つは、書き方がわからないということである。
- 3 きらいな理由のもう1つとして、「読んでも出てくる人の気持ちがわからない」「ながい話だとすじを忘れてしまう」「自分で思ったり考えたりすることがない」など、読みとり方に問題をもっている児童もかなり多い。

このような実態から次のような事項に注意して指導をしてみた。

1 読書感想文の基本的な段落の組み立て方やすじと感想とのおりませ方など、基本的な書き方をおさえる。
2 興味や意欲をもって、気がるに書ける感想文もとり上げる。
3 読む本はあまり長いものでなく、すじや主題のとらえやすいものを選ぶ。
4 読書会などして、読みを深め、いろいろな感じ方や考え方を知らせておく。

表7 段落意識について

段落意識と改行がだいたいあっているもの	13人(44.8%)
記述の途中で段落意識がくずれるもの、改行が気分的なもの	10人(34.5%)
段落意識がはたらいでないもの	6人(20.7%)

表8 句読点について

句読点がだいたい正しく てる	18人(62.1%)
分かち書きで、こまかく ちすぎる	11人(37.9%)

表9 漢字使用

既習漢字がだいたい使用 できる	10人(34.5%)
半分ぐらい使用できる	13人(44.8%)
ほとんどひらがなを使用 している	6人(20.7%)

表7から9までは、作文能力について、段落意識、句読点・漢字使用の3点から調査したものである。段落意識は56%の児童が問題を持っており、学年の目標も「(3) 段落ごとの構成を考えて事ごとにまとまりのある文章を書くことができるようにする。」と段落構成をとり上げているので段落ごとにまとめて書く指導を強化しなければならない。漢字使用についても $\frac{2}{3}$ の児童は学習した漢字の半数も使用していないわけである。句読点のうち方は低学年の分かち書きがまだ40%も残っている。そこで、次のような指導上の工夫を試みた。

- 1 段落ごとにまとめて書かせる工夫として、下書きの用紙を段落ごとに別々にして指導する。(校内研究会で、田部田先生が試みた方法を取り入れる。)
- 2 学習した漢字を文章の中で正しく使わせるために、すいこの段階で、ひらがなを漢字にする作業を取り入れる。
- 3 句読点のうち方もすいこの段階で扱う。

表10 感想文に書かれたいろいろな感想のタイプ

おもしろかった、かわいそうだった式の感想が書いてあるもの(総括的な感想)	25人(86.2%)
場面やできごとに対する感想が書いてあるもの(部分的な感想)	15人(51.7%)
自分とくらべての感想が書いてあるもの	2人(6.9%)
主題にふれた感想が書いてあるもの	2人(6.9%)

表10は、指導前に書いた感想文の中から感想の部分を取り出して分類したものである。文章のはじめか終わりに「おもしろかった」「かわいそうだった」など総括的な感想を書き、あらすじが大部分を占めているものが多い。また、部分的な感想のら列に終わり、書きたいことの中心がはっきりしないものも多い。指導にあたっては、次のことを留意した。

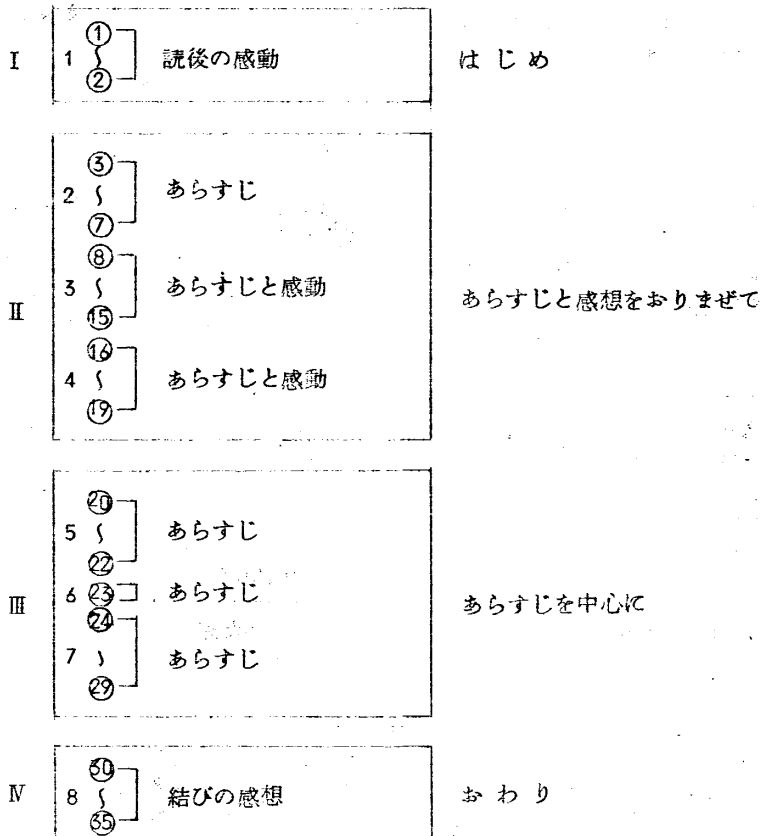
- 1 感じたことの質のちがいをわからせ、主題にせまるような感想も書かせる。
- 2 すじと感想のおりませ方を工夫させるために、すじの一部分を共同作文させる。



・「林君のノート」

書名	読みはじめと終わりの日
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ あらすじ</li> <li>○ 感想                             <ul style="list-style-type: none"> <li>いちばんおもしろかったところ</li> <li>登場人物についての感想</li> <li>主題にふれた感想</li> </ul> </li> </ul>	

「□ 野口英世を読んで」は、読書感想文の書き方を理解させるためのものであり、次のような構成になっている。



Iの部分は読後に心に強くのこったことを印象的に述べ、IIの部分はできごとの1つ1つについての感想を書き、IVでは、自分とくらべて感想を書いており、それぞれ、質のちがった感想が書かれている。また、あらすじと感想の部分がはっきり表現されているので、すじと感想のおりませ方、段落構成の指導によい教材である。

読みもの「かわいそうなぞう」について

・日本標準の小学生文庫、第2集 4年「けんかこぶ」の中の1編で、作者は土家由岐雄である。戦争中、上野動物園で実際におこったできごとをもとにして書かれたもので、戦争のお

そろしさ・むごたらしさをはだみに感じさせる作品である。

- ・この作品を選んだ理由は、すじが簡単で主題がわかりやすいことや、読書週間中の読書会用図書になっていたので読みがふかまっていた。また、あまりに長いものだと抵抗が考えられるので、みじかく、やさしい物語をとり上げ、感想をいろいろな角度からふくらませて書かせようとねらったからである。

#### 4 指導の実際

(1) 単元名 読書の記録や感想文を書く

(2) 単元目標 1 読書の記録のいろいろな書き方を理解させる。

2 感じたことをいくつかにまとめ、すじと感想のありませ方を工夫し、段落構成のしっかりした読書感想文を書く習慣をつける。

3 進んで読書し、記録したり感想文を書いたりする習慣をつける。

(3) 指導計画

総時数 15時間

区分	学 習 過 程	時 間	指 導 の 観 点
事前指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 「かわいそうなぞう」の感想文を書く。</li> <li>◦ 「かわいそうなぞう」の読書会を開き、感想を話しあう。</li> </ul>	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 感想文を書く能力を調べるために、2週間前に書かせる。</li> <li>◦ 本を読んでも、考えることや思うことがあまりないという児童に、友だちの感じ方を気づかせるために読書会をさせる。</li> </ul>
第一次	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 単元のねらいを確認する。</li> <li>◦ 読書ノートの書き方を知る。</li> </ul>	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 週1時間の読書の時間の記録をもとにして、3つのちがった読書記録を指導し、それぞれの特徴を理解させる。</li> </ul>
第二次	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 読書記録を書く。</li> <li>◦ 記録を発表する。</li> </ul>	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 簡単な項目だけをあげた記録ではなくメモや感想のある記録を書かせる。</li> </ul>
第三次	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 読書感想文の組み立て方を調べる。</li> <li>◦ 組み立てメモを作る。</li> </ul>	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 事前に書いた感想文と、「野口英世を読んで」をくらべながら、組み立て方を指導する。</li> </ul>
第四次	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 感想の書き方を調べる。</li> <li>◦ あらすじの1部分を共同作文する。</li> </ul>	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 感想には、いちばん心にこったこと、できごとに対する考え、主題にせまるようなものなどいろいろあることを理解させる。</li> <li>◦ すじの一部分を共同作文させ、あらすじのら列にならぬようにさせる。</li> </ul>
第五次	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 感想文を書く。 (書き出しの部分や、中心をどこに) おくか考えて書く。</li> </ul>	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 段落意識を育てるために段落ごとに下書き用紙を別々にして書かせる。</li> </ul>
第六次	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 推考し、清書する。</li> </ul>	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 書き出しや結びはどうか、すじと感想はどうか、句読点、学習した漢字などについて推考させる。</li> </ul>

第七次	◦ 作品を交換して読む。	1	◦ 友だちの作品に批評文を書かせる。
第八次	◦ 主人公や作者に対する手紙を書く。 ◦ まとめ、練習をする。	2	◦ 感想文の類型化を防ぐために、手紙文による感想文を扱う。
事後指導	◦ 作品をとして「読書感想文集」を作り家庭回覧する。		◦ 児童の作品を父母にも読んでもらい、今後の参考にするために回覧の方法を試みる。

(4) 指導案 ----- 第4次の指導について

① 本時のねらい 感想には読後に強く心に残ったもの、できごとに対する感想、主題にせまる感想などいろいろあること、感想とすじのおりませ方を理解させる。

② 展 開

	指導事項	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	資 料 及 び 連 関	評 価
導 入		1 本時の学習のねらいを確認する。	・ 感想にはどんな書き方があり、感想とすじのおりませ方を調べることを確認させる。	センテンスカード	
展 開	段落を考えて書く	2 「野口英世を読んで」I II IV段落の感想のちがいを調べる。  3 あらすじの書き方を調べる。  4 あらすじの書き出しの1部分を共同作文する。	・ 次のようなちがいのあることに気づかせる。 I 段落 読後の感動 II 段落 できごとに対する感想 IV 段落 自分とくらべての感想  ・ 形式段落②のように、物語の解説の部分が必要であることを理解させる。 ・ あらすじのら列になるのを防ぐために、共同作文の方法をとり入れてみる。	組み立てメモ	・ 感想のちがいがわかったか（発表）  ・ あらすじと感想のおりませ方がわかったか。（発表、組み立てメモ）
終 末		5 まとめをする  6 次時の学習の予定を知る。	・ 段落ごとに別の用紙に、あらすじの段落の1部分を書かせる。  ・ 感想の中心をどこにおくか決めて、感想文を書くことを予告する。	下書き用紙	

(5) 授業の記録-----（省略）

(6) 授業の分析と考察

① 事前の調査で「感想をどう書いたらよいかわからない」「読んだあと感想が思いつかばない」という児童が多かったので、学習活動2のように、感想の質のちがいを理解させたが、感想のとらえ方が具体化されたものとする。

② 感想文があらすじのら列で終わってしまうという実態があるので、あらすじの書き方として物語全体の総括的な解説の部分と、心に強く感じたできごとの部分があることに気づかせ、次のようにあらすじの1部分を共同作文させた。

・物語の解説の段落 「この物語は、上野動物園でほんとうにあった話だ。-----」

・できごとを書く段落 「ワンリーとトンキーはやせほそって目ばかりとび出し、耳ばかり大きくなった悲しいすがたでげいとうを見せた。-----」

「何日もえさをやらない日がつづき、ついにぞうは動けなくなり、おりの中に横たわったままになった。-----」

「とうとう ぞうはげいとうをしながら死んだ。-----」

## 5 実践のまとめ

(1) 作文指導では教科書教材をいつ扱いか問題だが、学習計画をたてる段階、組み立てメモを作る段階、感想の質のちがいを調べ、すじと感想のおりませ方を理解する段階、推考の段階で扱った。

(2) 事前指導で、感想文を書かせ、各自の作品から問題を発見し、解決して行く方法をとったのは学習に目的意識、問題意識がわいた。

(3) あらすじの1部分を共同作文させて、あらすじのら列になるのを防いだのは、すじとあらすじのおりませ方が具体的に理解させることができた。

(4) 段落ごとにまとめて書かせるため下書きの用紙を別々にさせたのは、段落意識と改行（形式的なもの）とを一致させるのによい方法だった。

(5) 本を読んでも考えることがない、何も感じないという児童のために読書会を開き、話し合いをしてから書く活動にはいったが、いろいろな感じ方や考え方がわかったと思う。

(6) 読みものは、やさしいものを選び、主題もとらえやすかったのがよかった。

(7) 基本的な読書感想文の書き方をねらいとして指導してきたが、感想文の類型化を防ぐために、主人公や作者に対する手紙も扱ってみた。

(8) 作品の発表の方法として、1冊にまとめて「読書感想文集」とし家庭へ回覧した。前書きに、読書感想文の指導の観点などつけ加え、気づいたことなど記入していただくようお願いしたところ次のようなものがあった。



父 母 が 記 入 し た も の	児 童 が 記 入 し た も の
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4年生としてはよく主題をつかんでいる。</li> <li>・ 自分の意見がのべられていてよい。</li> <li>・ 字のまちがいが少しあるが、戦争とぞうの苦しみがよく書けている。</li> <li>・ よく考えて書いてある。</li> <li>・ 自分の気持ちがたくさん書いてある。</li> <li>・ 本をたくさん読んでいるようです。文の組み立て方や表現のし方がうまい。</li> <li>・ 心の中でよく考えてから書くようにしている。</li> <li>・ じょうずな文章です。</li> <li>・ すなおに気持ちが書けています。</li> <li>・ 文のはとび方がよいです。文のつなぎ方もよいです。</li> <li>・ おわりのまとめ方がよい。</li> <li>・ 文章にまとまりがないところがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ぞうやおじさんの気持ちにくらべて、自分の気持ちが書いてあります。</li> <li>・ ぞうつかいのおじさんの気持ちをよく想ぞうして書いています。</li> <li>・ 自分が物語の中の人になったような気持ちで書いてあります。</li> <li>・ すじが多いようです。</li> <li>・ この物語を知らない人でも、この文章を読むと、よくわかるように、すじと感じたことがうまく書けています。</li> <li>・ 感じたことや、考えたことが、たくさん書いてあります。</li> <li>・ 字がらんぼうです。</li> <li>・ 字もきれいだし、漢字がたくさん使っています。</li> </ul>

## 6 問題点

- (1) 感想文の類型化を防ぐ方法として、手紙を扱ったが、このほかエンピツ対談の本の紹介などいろいろな方法を指導し、気がるに感想文が書けるように指導して行かなければならない。
- (2) 作文能力の分析の方法を表現内容や記述の面から多角的に研究しなければならない。
- (3) 本を読んでも考えることがあまりないという児童には、読むことの指導を強化し、また、いろいろな感想文を読ませ、感想のもち方など身につけさせなければならない。
- (4) 学習した漢字を文章の中で正しく使う方法など工夫すべきである。

## 7 おわりに

「感想文を書くのはきらい」「書き方がわからない」という児童の実態から問題をとり上げ、基本的な読書感想文の指導を実践してみたが、個人の感じ方、考え方を大せつにしなければならないものだけに、とても、むずかしさがあった。これからは気がるに感想文を書いたり、感想を話し合ったりする機会を多くし、記録することを習慣化させて行きたいと思う。

## 児童作品

「かわいそいな象」を読んで

四年二組 小 宮 奈津江

「えさをください」と弱々しい声でせがむ象の声と、「戦争をやめろ。戦争をやめろ。」という象使いのさげび声が、本を読み終わったあとまで、わたしの耳のおくに聞えてくるような気がする。また鼻を高くさしあげ、おりによりかかって死んだ象のすがたが目にくかんでくる。

この物語は上野動物園でほんとうにあった話だ。東京に毎日雨のようにばくだんが降り、もし動物園におちたら動物たちがおりからにげ出してたいへんなことになるというので、もうじゅうたちを殺すことになった。ジョン・ワンリー・トンキーの三頭の象も殺されることになった。毒のじゃがいもや毒の注しやで殺そうとしたが失敗したので、何日もえさをやらないで殺したそうだ。

何日かするとワンリーとトンキーはやせぼそって目がとび出し耳ばかり大きくなった悲しいすがたでばんざいのげいとうを見せた。げいとうをすればえさがもらえると思ったからだ。象使いはなき声をあげて、えさのある小屋へとびこみ、えさと水をやった。きっと、象の気持ちを通じたのかも知れない。また、動物園の人たちはみんなこのようすを見て見ないふりをした。象を一日でも長く生かしておきたかったからだろう。

何日もえさをやらない日がつづきついに象は動けなくなり、おりの中に横たわったままになった。流れる雲を見つめながら、「むかしのようにげいとうをしてみんなを喜ばせたいなあ。」などと思ったのかも知れない。おじさんたちは、象のところへだれも行かない。象にえさをやらないためだろうか。かわいい象が苦しんでいるのを見たくないからだろうか。象使いも、象と同じくらい苦しいのだと思ふ。そして、心の中では「がんばれよ。」と言っているのかも知れない。

とうとう象はげいとうをしながら死んだ。象使いは天にこぼしをふり上げて、「戦争をやめろ。戦争をやめろ。」と言っていたいへん悲しんだ。象使いはえさをやらないでつみもない象を殺してしまったのがやしいのだろう。わたしにも象使いの気持ちがわかるような気がする。

この物語でいちばん苦しんだのは、象使いだと思ふ。それは象の苦しみは何日も何日もえさをもらえない、死ぬほどの苦しみだが、えささえもらえればしあわせなのだ。しかし、象使いは、自分の子のように、育てた象を殺すなんて、どんなに苦しかったろう。毒のじゃがいもをやる時は、悲しい顔をしていたにちがいない。また、毒の注しやの時は手がぶるぶるふるえていたにちがいない。こんな残こくなことまでしなくてはならない戦争をどんなににくんでいただろうか。また、食べ物をやれないときのおじさんは自分でも食べ物のがどを通らなかつただろう。戦争に出会ったことのないわたしにも戦争のおそろしさ、苦しさ、悲しさがよくわかった。

## 評

読書感想文を子どもに書せる機会がたいへん多いので、それだけ感想文の指導をしっかりとっておかなければならない。

読書感想文は、まず文章そのものを正しく読みとらなくてはならない。誤まった読みとりをしていて、それをもとに感想を書いたとしたら、いくらうまく書けていても意味がないだろう。したがって読書の感想を書くときには文章をどのように読みとっているかを問題にしなければならぬ。

つぎにだれに読んでもらうのか。いいかえれば書く目的をはっきりさせておくことが大せつである。これによって書く分量や限度がきまってくる。

それから、読書感想文の書き方、そのものを指導することがたいせつである。これは当研究を参考とされたい。

終わりに当研究は感想文の指導法についてきめ細かな実践例を出してもらい、実際の指導上大いに参考となる研究である。個人の感じ方、考え方を大せつにするためこの種の指導力をいれてもらいたい。